京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成 23 年 4 月 22 日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長　辻　井　昭　雄　様

京 都 大 学 総 長

松　本　　紘

事業区分	平成 22 年度・大学全体計画事業助成		
事業名	京都大学国際シンポジウムの開催		
成果の概要	「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有(　　)		
会計報告	事業に要した経費総額	7,229,000円	
	うち当財団からの助成額	5,000,000円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学 大学運営費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
	国外旅費	1,973,000	1,410,000
	国内旅費	270,000	180,000
	招へい旅費	1,850,000	1,850,000
	会場費	500,000	250,000
	会場備品レンタル費	200,000	100,000
	同時通訳機器レンタル費	900,000	900,000
	印刷費	600,000	310,000
	その他	936,000	0
	合計	7,229,000	**5,000,000**

成 果 の 概 要

京都大学総長　松本　紘

【京都大学国際シンポジウムの開催】

京都大学では、世界に開かれた大学として先端的な学術研究を積極的に展開していくため、平成 12 年度より毎年、本学が誇る独創的な学術研究を対象とする国際シンポジウムを海外で開催しています。平成 22 年度は、中国・西安市および名古屋市において国際シンポジウムを開催しましたので、ここに報告します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第 14 回京都大学国際シンポジウム

2010 年 6 月 24 日、中国・西安市において「第 14 回京都大学国際シンポジウム：アジア世界文化遺産の高精細デジタル化研究」を開催しました。今回のシンポジウムは、工学研究科で開発された最先端イメージング技術を世界に向けて発信することを目的として、アジア世界文化遺産の高精細デジタル化研究をテーマに、京都大学教育研究振興財団の後援、西安交通大学等の協力を得て開催し、約 80 名の参加がありました。

当日は、井手亜里 工学研究科教授による趣旨説明の後、蒋庄徳 西安交通大学副校長の歓迎挨拶および吉川潔 理事・副学長の開会挨拶により始まりました。

シンポジウムでは、文化財の高精細デジタル化技術や、それを用いたアジア世界文化遺産の保存・修復・活用のための国際研究基盤を構築するプロジェクト等について、英国、イタリア、韓国を含む 10 名の研究者による発表および意見交換が行われました。

本学主催のレセプションでは、西安市と姉妹都市にある門川大作 京都市長から鄭南寧 西安交通大学校長へ宛てたシンポジウム開催を祝う親書を、椹木理事補から蒋副校長に手渡しました。

今回のシンポジウムにより、アジア地域の世界文化遺産の保存やデジタル化研究が促進されるとともに、世界のその他の国・地域における文化遺産・文化財保護の研究に寄与されることが期待されます。

第 15 回京都大学国際シンポジウム

2010 年 9 月 19 日から 20 日にかけて、愛知県名古屋市の名古屋港湾会館において、「第 15 回京都大学国際シンポジウム：生物多様性と動物園・水族館 ―生き物からのメッセージ―」を開催しました。今回のシンポジウムは、そのテーマから、研究者や学生、動物園・水族館関係者だけでなく、一般からも多くの参加者があり、二日間で 8 カ国から延べ約 480 人が訪れる活発なものとなりました。

シンポジウム初日は、野生動物研究センターの幸島司郎 教授の挨拶に始まり、「第 1 部：自然生息地での研究と保全」としてブラジルのアマゾンカワイルカやインドのアジアゾウをはじめとする世界各地の研究を紹介しました。午後には、本学を代表して藤井信孝 理事・副学長が挨拶を行い、シンポジウムのテーマである生物多様性に対して、大学と動物園・水族館が協力しながら貢献していくことの重要性を述べました。続いて、山田雅雄 名古屋市副市長の挨拶があり、直前の講演についてのコメントや名古屋市の紹介など親しみやすい内容で、会場は和やかな雰囲気に包まれました。その後行ったポスターセッションは、2 室用意した会場がどちらも大変な盛況となり、発表者と参加者が熱心に質疑応答をする場面があちこちで見られました。

同日夕刻に名古屋港水族館の黒潮水槽前で行ったレセプションでは、マイワシの群れが泳ぐ幻想的な雰囲気の中、動物園・水族館関係者と研究者・学生が歓談し、交流を深めました。

二日目には「第 2 部：動物園水族館での研究・保全・教育」として、アメリカやオーストラリアの動物園・水族館の取り組みや研究協力についての発表があり、参加者も熱心に聞き入りました。シンポジウムの最後には祖一誠 名古屋港水族館長、小林弘志 名古屋市東山動物園長から、生物多様性に対するよりよい貢献を目指して、シンポジウム提言が発表されました。

動物園・水族館と大学等の研究機関との協力や研究が他国に比べて遅れていると言われる日本において、本シンポジウムはお互いの活動を知り、協力体制を強めていく上での画期的な機会となりました。これを機に、環境教育や研究、生き物の保全の分野でより活発な協力体制が構築されていくことが期待されます。

当事業を推進するにあたり、貴財団より多額の助成をいただきましたことに対し、深く感謝するとともに、篤く御礼申し上げます。